事があれば、信仰に結ばれた民衆が立ち上がる。それが中世佐伯領の姿であろう。祖母嶽を信仰した大神系の各氏族、九州の山岳を修行の道場とした阿蘇氏・高千穂氏米良氏・菊池氏、各氏族の居住する所、必ず崇拝する大権現が祭られていて、しかも熊野・愛宕・王子・白山等の社名が多い。如何に中世が密教的修験道の信仰世界であったかを如実に物語るものといえよう。今後の課題として目を向ける必要があるのではないか。そしてまた、祖母・阿蘇等の山岳信仰をする氏族と氏族を繋ぎ合わせると、中世社会の各氏族と佐伯氏との歴史のもう一つの側面が見えてくるようである。

佐伯氏と米良氏・菊池氏等の関係も、掘り下げれば実に奥が深い。また、中世を知る上に価値ある研究と、私なりに思うのである。

佐伯領域の先祖達が築いた数々の石造物、諸々の文化財、それと共に伝承された民俗行事、それ等を無視した中世の佐伯氏を語るには、多くの難点がある気がしてならない。

十三重塔が何かを語ってくれそうである。名実ともに佐伯地方の「シンボル」であろう。

表紙解説

『高鍋藩・海路図』

西米良の帰りに高鍋町の歴史総合資料館を訪れた。秋月氏の治めた高鍋城跡、舞鶴公園の中にある。

当資料館所蔵の『海路図』が、頂いた「要覧」の表紙に使われていた。しかも、二万石佐伯城が正面中央に掲載されていたので感激一潮であった。

園内には復元された万歳邸や、刀工鍛冶場などがあって、周囲の庭園も見事である。

ついでながら佐伯藩四教堂の教授を務めた秋月橘門は高鍋藩の出身者である。

さとうたくみ